

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.4 April 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

4

CONTENTS

- ・ 巻頭言
『天理教事典 第三版』刊行を言祝ぐ
／高見宇造..... 1
- ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (48)
第6章 吉本隆明と『思想のアソロジー』⑦
／井上昭夫..... 2
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (27)
「かれい」について②
／佐藤孝則..... 3
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道
の様相 (16)
戦前のハワイ伝道と日系移民社会⑥
／尾上貴行..... 4
- ・ 「おふでさき」の標石的用法 (32)
動詞について⑩
／深谷耕治..... 5
- ・ 伝道と翻訳 —受容と変容の“はざま”で—(10)
宗教言語の翻訳③
／成田道広..... 6
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (14)
ライシテの歴史⑪
／藤原理人..... 7
- ・ 現代世界に生きる「人間」と「宗教」—再考— (4)
「意味」を求める存在としての人間
／岡田正彦..... 8
- ・ 遺跡からのメッセージ (33)
文化遺産を今に活かす① 文化遺産都市・
天理
／桑原久男..... 9
- ・ ヴァチカン便り (31)
女性殺害事件
／山口英雄..... 10
- ・ 思案・試案・私案
共助意識が風化？
／八木三郎..... 11
- ・ English Summary..... 12
- ・ おやさと研究所ニュース..... 13
出張報告 (堀内みどり)／第2回東アジア
宗教研究フォーラム報告 (金子昭)／新刊
紹介 (『天理教事典 第三版』)／平成30年
度公開教学講座

巻頭言

『天理教事典 第三版』刊行を言祝ぐ

ことほ

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

この度、おやさと研究所としては念願の『天理教事典 第三版』を刊行させていただく事になった。ご承知のように、『天理教事典』の編纂・刊行は昭和52年、中山正善2代真柱10年祭の記念出版に始まる。それは立教140年であるから今から40年も前の事になる。当時、教内としては待望久しい取り組みであったと聞いている。同「序文」には、世界各地への布教伝道が進む中でも「その真の姿と全容は、未だそれほどよく知られているわけではない」、その一因として「一般の人々にわかり難い天理教独自の用語を、平易に解説する書物が乏しかったこと、あるいは教団の組織ならびに活動全般についての、体系的な紹介があまりなされなかったこと」を挙げているが、本教が事典を持つ意義を簡明に述べている。

ところで、この刊行に対して日本宗教学会の会長を務めた柳川啓一氏（東京大学名誉教授）は「宗教教団としては短い、立教以来一四〇年の歴史のなかで、こうした自らを客観的に振り返る仕事ができ上がったことは、天理教にとっての一つの節になり、教団の成熟度を示す目盛となるであろう。……この事典において、文章として外側に表現されたということによって、時には苦痛を伴う『自己省察』（自らをかえりみる）の機会を持ったことであり、それは飛躍する補助台となるに違いない」と書評に誌された（『天地』昭和53年6月号・天理教道友社）。柳川啓一氏は昭和48年に日本で初めての本格的な『宗教学辞典』（東京大学出版会）を編纂された事を考え合わせると真に含蓄ある言葉と受け止める事ができよう。

こうして始まった『天理教事典』の編纂は、その後、平成元年には『教会史篇』が、平成9年には『改訂版』が2代真柱30年祭を迎えるに際し刊行された。そして今回、2代真柱50年祭に向けた取り組

みとして20年ぶりの全面大改訂を行ったものである。研究所としては平成26年頃から本格的な編纂作業に取り組み、刊行まで約4年の時間を費やした事になる。

前の改訂版も初版同様、教内外の多くの方々に活用をいただき、天理教と社会の意思疎通の大切な媒体として大きな役割を果たしてきたが、早くも20年の歳月が経過し、収録した見出し項目やその記載内容も追加、追記の要に迫られる事となった。天理教団としても、この20年の中で様々な出来事があった。教祖の年祭も120年、130年と2度の年祭を勤めた。真柱の理も現、中山善司真柱が継承されている。『天理教事典』は天理教の全容ならびに教えの真髓を、広く一般の人々にも理解してもらいたいという趣旨で取り組まれた経緯を考えると、今回の第三版刊行は真に意義ある事と考えている。

申すまでもなく、事典の編纂は収録項目の選定に始まる。今回も所内で幾度も時間を掛け検討を重ねたが、その言葉、項目の意味するところを何よりも限られた文字数で、しかも過不足なく誤りなく表現しなければならない。これは至難の業であると申しても過言ではない。これが研究所に事典編纂作業を委ねられた所以であるとあらためて受け止めている。事典の活用は色々にあると思うが、「引く事典」のみではなく、是非「読む事典」としても活用を願いたい。私も編集作業の中で幾度も原稿を精読したがその度、どの項目をとってもその深遠な意味内容が実に簡潔に丁寧に、そして何よりも分かり易く書かれている事に感激、それは至福の時間となった。何よりも研究所員は手にして下さる読者の皆さんの立場に立って今回の改訂作業に取り組んで下さった。これが何よりも私の誇りとする処である。皆さんの味読を心からお願いしたい。